

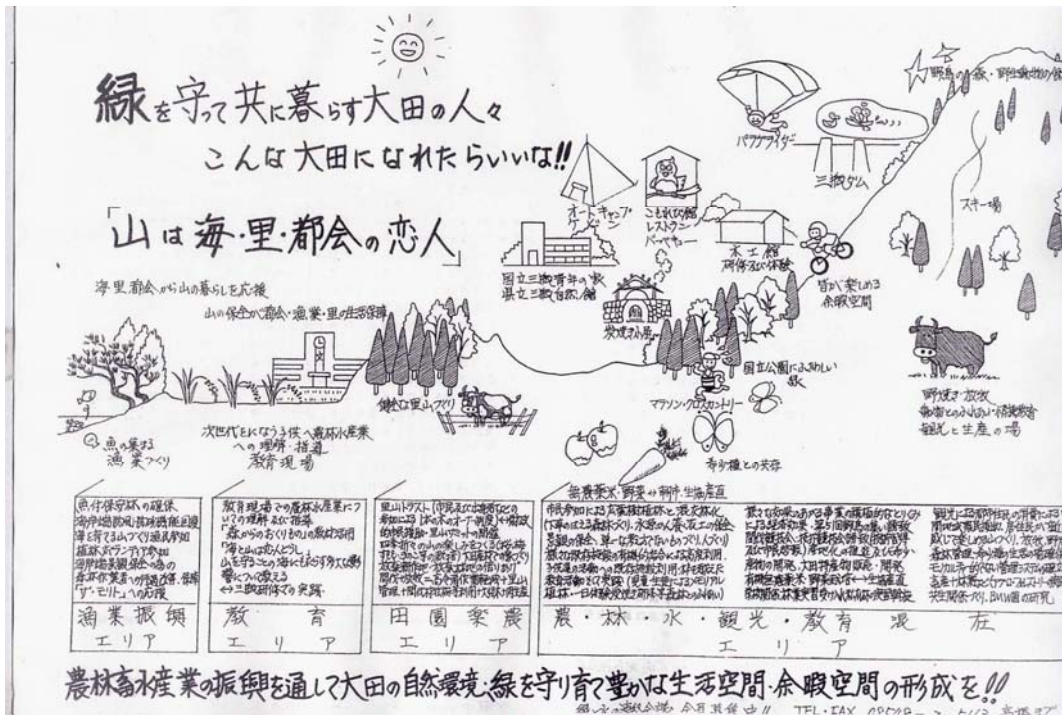
地域資源の活用による草原・里山など二次的自然の保全

高橋泰子(認定NPO法人 緑と水の連絡会議)

はじめに

私ども緑と水の連絡会議は、平成4年の任意団体発足から数えて今年で15年の活動の歴史がある。当初は家庭環境を考える活動であったが、国立公園三瓶山の草原保全に発展。今では、人間を含むバイオマス地域資源の見直しとその利用を通し草原・里山など人の手が加わってこそ守られる二次的自然の啓発と保全の実践を行う。そのため伝統的農林漁法を継承する地域住民間をコーディネートし、物質循環の流れとお金が回るシステムを作ることによって大田市固有の里地・里山特有の文化的景観および生物多様性の保全をめざす。また、その実現のために都市と農村との人的・物的交流を行い、循環型社会の再構築・コミュニティの再編・地域活性化および環境教育・人づくり等を行っている。ここでは、具体的に木質バイオマス資源活用による二次的自然保全の実践例を報告する。

図1. NPO法人 緑と水の連絡会議が行う里地・里山の二次的自然の保全の多様な実践案



結果

上記策の中でも、福祉施設への木質バイオマスボイラー導入熱エネルギー販売事業では、地域木質バイオマスの熱利用を通し里山再生と物質循環を実践、経済システムをも確立した。このボイラー導入によるチップ利用は年間約30トンに上り、約32トン/年のCO2削減を行っている。このように地域資源の見直しによるエネルギーの自給自足・農林水産振興と地球温暖化防止に寄与する結果を得、施設循環から地域循環のモデルを示し、里山の保全を経済ベースで実証することができた。

(連絡先: 高橋泰子 ohgreen@iwami.or.jp)